

タイトル：相の浦口女人堂跡

女人道から高野山の聖なる高原地域へと下る7つ場所は、道を遮る建造物はないのですが、歴史的に「入口」と呼ばれていました。相の浦口女人堂跡は、女人道が高野山の高原地域と、聖なる山の山腹を下って相浦の村に通じる道との交差点に立っていた門の側にありました。

晴れた日には、この場所からは南から西へと連なる和歌山の山々の素晴らしい展望が得られます。特に、秋の紅葉のシーズンには山腹が鮮やかな彩りになります。斜面にはコウヤマキが生えています。この常緑樹は日本の固有種で、2億年以上もの間この地に植生しています。コウヤマキの針のような葉は長持ちして香りが良く、渦巻きの形が花に似ているため、この枝は公式の場での生花に使用されることが多く、また、高野山の寺院や神社、お墓にも供えられます。

相浦や聖山の近くのその他の場所から旅してきた人々は、高野山に参拝し、自分の地元や、町や村の特産の捧げ物を持って、高野山で捧げるためにこれらの坂を登りました。こうした品物を山の上まで運ぶことによって、巡礼者の献身、尊敬、信仰心を示したのです。